

三林輝夫先生(音楽学部・声楽)が 学生にすすめたい本

日頃読書に縁遠い私のような人間にも、なにか事件にでも遭遇するように“目からうろこ”というような本との出会いがある。

齋藤磯雄著「フランスの詩と歌」(ダヴィット社)は、フランス近代歌曲に傾倒した仏文学者が、名曲20曲を選んで歌の魅力に迫り、詩の分析を行ったもので、著者の格調高い訳詞が添えられている。楽譜を読み、ピアノを良く弾いたという著者の、フランス歌曲への愛情がどのページにも満ちていて、美味しいお料理のレシピを読んだときのように、歌いたい気持ちをそそられた。フランス詩法の綾というか精妙さの一端に触れ、精根込めて作曲した天才作曲家たちの偉業を探索し、それまでただただ歌うことが好きだった私がフランス歌曲の世界に益々のめり込んでいくきっかけになった一冊である。この本は今では絶版となっているが、平成3年に出版された齋藤磯雄著作集 の2が、この「フランスの詩と歌」であり、運のいい人は古本屋で見つけることができるかもしれない。

そしてその先に鈴木信太郎著「フランス詩法」上下二巻(白水社)が当然のようにしてあった。時々取り出して見るのだが、たいした本である。

若桑みどり著「薔薇のイコノロジー」(青土社)もさまざまな“目からうろこ”を与えてくれた一冊である。海から美しいヴィーナスを誕生させたことに大地が嫉妬したので、神は地上で最も美しい花である薔薇を与えたというギリシャ神話は良く知られているが、著者は薔薇の花が象徴するものをめぐってヨーロッパの絵画、彫刻、建築、工芸等中心にあらゆる時代を越えた考察を展開している。私達が日頃親しむイタリア古典歌曲などの歌詞の中でどれだけ解釈のヒントを頂いたことが知れない。

「ハリー・ポッター」の既刊四冊も秋の夜長にお勧めしたら笑われるだろうか。私の愛読書である。